

AMCWA会報

NPO法人 アジア母子福祉協会

東京都品川区西五反田2丁目15番7号

ジブラルタ生命五反田ビル3F-ITL

mail: tokyo@amcwa.org tel/fax: 03-6424-5681



ミャンマー、マダガスカルと我々

アジア母子福祉協会理事長 山口洋一

ミャンマーでは混沌とした情勢が続いておりますが、日本とこの国との関係は、欧米諸国とは異なった様相を呈しております。欧米各国は軍事政権と言うだけで、悪玉と決めつけ、対話をするどころか、むしろ制裁を科する態度ですが、日本の政策は異なっております。

日本は軍事政権の「自国の国情に合った形で国造りを進めているのだ」との言い分にも耳を傾けて一定の理解を示し、軍政とも対話を絶やさない姿勢をとっております。他方、アウン・サン・スー・チー女史の反政府勢力ともコンタクトをとり、軍政側との歩み寄りを促す努力を払っております。

現にミャンマー駐在の丸山大使は、政府側、反政府側の双方と緊密な接触を保ち、日本政府の方針に沿った活動を展開しております。拘束されているアウン・サン・スー・チー女史の解放を求める等、政府側には耳の痛い申し入れもしつかりと行っております。とりわけ丸山大使はビルマ語に堪能で、自国語同様に身に着けておりますので活躍ぶりは注目されております。

日本政府のこの方針は長年変わることなく続いており、私も大使であった当時（1995～1998年）にはミャンマーではまさにこの方針に従い、行動致しました。女史の邸宅は、大通りを挟んで日本大使公邸（当

時）の向かい側に位置しており、当時彼女は軟禁状態から自由の身になっておりましたので、週末になると自宅の門扉越しに、マイクを使って大演説をぶっておりました。この演説も私の公邸ではよく聞こえました。この演説集会は日本でも知られており、日本人観光客のバスが乗り付けてくることもありました。ある時、演説が終わってから、女史は門前にいた日本人を門内に招き入れ、「軍が支配しているこの国にはお出でにならないよう、日本の皆様に伝えていただきたい」と話した由である。



マダガスカルと日本とは常に良好な関係が続いております。本年は1962年に初代日本大使が、フランスから独立したマダガスカル共和国の初代大統領へ信任状を奉呈してから60年の節目に当たるので、在マダガスカル大使館では、「日本マダガスカル友好60周年」として広報活動を展開する企画を立てており、新聞紙面の買い上げを初めとするPRを実施することになっております。

弊会は今年度も両国の提携先と手を携え、草の根レベルの支援活動に力強く取り組んでいきます。

ミャンマー幼稚園支援について

連合様「愛のカンパ」及び東電労組様の支援で弊会が取り組んできたミャンマーの幼稚園支援事業もおかげさまで2014年以来8年となりました。継続した取り組みを支援いただきありがとうございます。また、この間、様々な形でミャンマー支援にご寄付・ご協力いただいた方々にも改めて御礼申し上げます。

さて21年度の活動も引き続き新型コロナ流行に加え昨年2月1日に発生した政変により制約を受けました。今年度も訪問はかないませんでしたが20年度末送金した幼稚園施設改修のうち、一件\$1000の中型改修5件は無事完了し、\$5000の大型改修は諸般の事情により遅れていましたが22年に入り開始されました。21年度支援の幼稚園についても6園が選定され、送金しました。新年度も連合様、東電労組様の助成を前提に活動を継続し、状況が許せば3年ぶりに訪問いたします。

なお、弊会は過去20年にわたり、ミャンマーの政治状況にかかわらず、草の根レベルで医療機器、中学校、奨学金、児童養護施設支援などさまざまな形



カチン州Myittashin幼稚園

で支援に取り組んできました。現下の政治情勢は引き続き先行きが見えませんが、そのような中でも連携先、支援先と緊密に連絡をとり、支援を確実に行っていくことが弊会の使命

と考えています。

★第23回定期総会★

令和4年度定期総会を5月21日日本倶楽部で開催します。事業・会計・監査報告と活動計画・予算案審議、役員改選が行われます。正会員は出欠・委任状提出をお早めにお願いたします。一般会員、ご支援者のオブザーバー参加もできます。Zoom利用も検討中です。なお感染対策を十分行いますが流行状況により開催方法の変更もありえます。

ナモロナ・プロジェクトの思い出



発電所付近の全景 '80.7.21.

アジア母子福祉協会
会員 天内圓

日本国政府が初めて
マダガスカル向け円借
款の供与を決めたのは
1969年、私はまだ学生
でした。

翌70年、ナモロナ川電源開発調査団によりフィジビリテー調査が実施されました。ナモロナ川は首都アンタナナリヴから450キロほど南下したところを水源とした川で、その途中に水力発電所を建設する調査でした。発電能力は、2500キロワット2基、それでもフィアナランツォ州には十分すぎるものでした。この情報を知った守谷商会は、その発電所計画の受注を目指して動き出しました。

守谷商会は、明治の末に「明電モートル」の販売店として発足し、その後ポンプや建設機械、産業機械などを取り扱う、機械専門の中堅商社です。明電舎の筆頭代理店でもあります。2500キロワット2基という発電機は、重電5社中の下位にある明電舎の得意

分野で、守谷商会は筆頭代理店の名誉にかけてもこれを受注したいと願ったのでした。

発電所計画の総予算は20億円。当時の守谷商会の年商は900億円。海外工事経験もなく単独の案件受注はリスクが大きすぎます。そこで、大手商社の日商岩井と手を組み、日商岩井から機械部分を受けるというスキームで対処しました。そして1972年にアンタナナリヴに事務所を立上げ、駐在員として小早川浩を送り出しました。その翌年の73年、大学を出た私は守谷商会に採用され、何も知らないままにナモロナプロジェクトの担当となりました。

ところが翌74年、「石油ショック」が起こり、あらゆる物価が上昇しました。見積書には有効期限があり通常は1ヶ月ですが、有効期限を付けてはならないという社内通達は何度も出されたのでした。当然、ナモロナプロジェクトの実行費用も上昇し、再見積をしたところ当初予算の2倍以上の50億円という数字が出、計画そのものの実施が危ぶまれました。

しかし、本件のコンサルタント会社と発注者であるJIRAMA（水電気公社）は苦勞して仕様変更を行い、何とか30億円にまで圧縮しました。主な変更は、発電所からフィアナランツォおよび東岸のマナンジャリーまでの送電線工事を取り除くというものでした。資機材は送り届け、工事はJIRAMAが実施することにしました。

（後半、付録に続く）

マダガスカルプロジェクトご支援に感謝

アジア母子福祉協会常務理事 柳澤信一郎

おかげさまで21年度のマダガスカルプロジェクトは3月で終了しました。昨年度に引き続き、濱口会員と現地のアジャさんとの連携で、児童養護施設アンバトランビ児童園において植樹用地整備、苗木育成・調達、植付、過年度分の整備などが行われました。

会報43号既報のとおりクラウドファンディング(CF)に初めて取り組みましたが多くのご支援をいただき、総予算の約半額、60万円目標に対しその後のご支援も含めて95万円のご寄付がよせられました。重ねて感謝申し上げます。



プロジェクトの様子はAMCWAのフェイスブックで掲載しておりますので是非ご覧ください。CF支援、1万円以上の方へのリターンも3月1日にお送りしました。

なおマダガスカル、ミャンマーあるいは弊社全般へ

のご寄付を引き続き受け付けております。1ページのAMCWAアドレスあるいは下記電話までご連絡ください。事務局03-3936-3531(柳澤)



ナモロナ・プロジェクトの思い出(2 ページより続く)

天内 圓

追加の 10 億円の円借款が決定したのは 76 年、直ちに入札となり、日商岩井・守谷グループが受注することができました。77 年の 5 月から工事は開始され、80 年の 7 月に竣工しました。3 年半にわたる工期で、土木工事を担当したのは、大豊建設です。

私は 80 年の 10 月に小早川氏の後任として、妻とまだ幼い二人の娘たちとともにマダガスカルに赴任しました。発電所工事の方は完了しましたが、私にはプロジェクトに関する大きな宿題が二つ残されていました。一つは「コントラクターズ・イクイプメント」に関する関税支払いの問題、今一つは追加工事に関する支払いの問題でした。

JIRAMA との契約は、発電所を作り上げ、それを引き渡すことです。そのためには、ダンプトラックやブルドーザー、バッチャープラント（生コン製造設備）などが必要です。これを日本から運び、工事が終わったなら日本に持ち帰るという前提で、関税はゼロということになっていました。その一方で、大豊建設が下請けとして使った現地の国営土木会社が、工事が終わったら当該関税を払い、「コントラクターズ・イクイプメント」を無償で受け取るということになっていました。ところが、工事が終わるや否や、国営土木会社は倒産し、トラックやらブルドーザーなどは、皆一斉に、どこへともなく消えてしまったのです。明らかに計画倒産であり、当時のマダガスカル国内の汚職と腐敗を意味しています。それはそれとして、税関からは 1 億 2 千万円の関税の請求が日商岩井を經由して大豊建設に出されました。なんとも面倒なことでしたが、しつこく交渉を続け、1 年近くをかけて最終的には合法的にチャラとしました。倒産したのが国営会社であったのが効を奏しました。

追加工事の方は、当初予定していた発電所の下の方盤が大きな浮石のいくつかであることが判明し、本来の岩盤までの掘削量が増えたために発生したものがほとんどでした。その総額はおよそ 8 千万円。JIRAMA はその総額を国立銀行に積んでくれましたが、社会主義政策に失敗し、深刻な外

貨不足に陥っていた国立銀行は一向に支払ってくれません。この宿題をどう解決したかと言いますと、82 年に出された、日本の無償援助 3 億円、マダガスカル南部の水開発プロジェクトを大豊建設が受注（守谷商会は全面的にアシスト）、そのプロジェクトの円ポーションとマダガスカルフランポーションを差し替えるという手法を使い、国立銀行のお墨付きも得て、これも合法的に、やっ和对処したのでした。

その後、マダガスカル政府の円借款返済は、まったくの不能状態となります。円高が進み、その負債額は膨れ上がっていました。これに対し日本政府は、せめて金利の一部だけでも支払ってくれることを求め、その分の無償援助をしたのでした。およそ 2 千万円のおもに医薬品が供与され、在マダガスカル在住商社が回り持ちで取り扱うことができました。日本政府としても、帳簿上いきなり赤字にするわけにもいかず、何とか延命させ、やがて時を見計らい、すべての返済を免除しました。なんとも素晴らしい決定だと思います。

そもそも、日本政府が 1969 年にマダガスカルに円借款を供与しようとした背景には、二つの中国という問題がありました。毛沢東が率いる中華人民共和国が国連参入を目指す中、西側はこれを阻止しようとして、後進国の票集めに手分けして奔走したのです。その一環として、マダガスカルへの円借款がなされたのだとしかるべき人から聞いています。しかしその後、日本はアメリカに倣い方針を変換し、台湾を中国の一部と認め中国との国交を締結したのでした。

日本のマダガスカルへの円借款は、国連での票集めには寄与しなかったようですが、しかし何はともあれ、実質的にほとんどタダで JIRAMA はあの水力発電所を手に入れたのでした。あれから 40 年以上もたちますが、なおも問題なく発電所は稼働していると聞きます。プロジェクトに関与した多くの人々ともに、そのことをうれしく思います。

マダガスカルとニッポン、バンザイ！

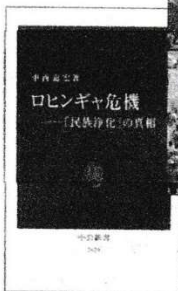
本書の主要目次

『ビルマ危機の本質』

- 第1章 新たな世界
- 第2章 軍政の発展
- 第3章 ディストピアへの漂流
- 第4章 デンベスト
- 第5章 攻撃のチャンス
- 第6章 軍の並び
- 第7章 軍と民衆
- 第8章 仮想現実の民政移管
- 第9章 未完の国家

『ロヒンギャ危機』

- 序 軍民危機の発生
- 第1章 国家の他者
- 第2章 国家による排除
- 第3章 国家の民主化
- 第4章 軍と民衆
- 第5章 ジェノサイド疑念の国際政治
- 終章 軍危機の行方、日本の役割



ビルマ危機の本質

タンミンウー著、中里 京子訳

河出書房新社
3,520円(税込み)

ロヒンギャ危機 —「民族浄化」の真相

中西 嘉宏著

中公新書
968円(税込み)

ミャンマーの課題と危機が判る書

評者

寺井 融

アジア母子福祉協会監事

ミャンマー(ビルマ)が、今後どうなっていくか。

『危機の本質』著者はウータント元国連事務総長の孫で、生まれも育ちも米国。国連に断続的に勤務し、カンボジアや旧ユーゴスロバキアにおける国連平和維持活動にも関わってきた経験を持つ。ミャンマーの軍事政権に対して「考える限りもっとも厳しい措置をとるべき」と主張してきた一人だが、国際社会によるミャンマーへの支援制限と経済制裁は「意図せぬ人道的危機をもたらした」と分析する。

同国は一九四八年の独立後、民主政治であった。ところが政党は抗争と内紛を繰り返して、華僑、印僑の外国人が経済の実権を握る。一九六二年にクーデターが発生。約半世紀に及ぶ軍事政権となる。

「外部の人間は、軍事独裁政権と聞くと、全権を握る警察国家を想像するにちがいない。だが、ビルマの現実とは大きく異なるもの」。巨大な官僚国家であり、政府の要所を政党人ではなくて、軍人が担っていた。

二〇一〇年に総選挙が行われ、軍系のUSDPが勝利。翌一一年春から軍政ナンバー4だったテイン

セン首相が、新大統領に就任した。欧米諸国は(日本のマスコミの多くも)「軍政の延長だ」と批判した。

ところが、政治犯の釈放、政治活動の自由化、言論・出版の自由、労働組合の公認、そして二重為替問題を解決。自由化に反対した守旧派を脇に追いやり、各界各層から改革派を結集して、山積する課題をこなす。シンガポールの経営大学を卒業したばかりの弱冠二十二歳の青年も大統領府で採用し、連絡調整にあたらせる。タンミンウー氏自身も、新大統領のアドバイサーの役割を果たして行く。矢継ぎ早に改革が断行され、日本で言えば、明治維新や戦後復興期のような躍進時代となった。

それでも「彼に対する称賛は、アウンサンスーチーに対する称賛の足もとにもおよばず、二〇一五年総選挙では、アウンサンスーチーが率いるNLD(国民民主連盟)が圧勝し、政権交代となる。

しかし、女史には「明確な政策目標も、達成すべきアジェンダもなければ、公務員の配置転換もほとんどせず、閣僚の日々の仕事に口を出すこともなかった」。前政権が手掛けていた諸改革はスト

ップされ、少数民族武装組織との和平交渉も頓挫させてしまう。

そこにロヒンギャ問題が顕在化する。それは中西嘉宏著『ロヒンギャ危機』(中公新書)が詳しい。同問題の対応にもアウンサンスーチー政権は苦慮するが、二〇一五年総選挙で、NLDが議席を伸ばす。軍は不正選挙であったと主張し、再調査を要求したが否定され、二一、クーデターとなって行った。

『ビルマ危機』ではクーデター後の著者からの緊急寄稿が掲載され、「隣国からの大規模な支援なしに、反徒が新たな軍を築いて既存の国軍に対峙するのは不可能」と述べている。だが、カンボジアにおいて、ヘン・サムリンがベトナム軍の直接介入を得て、ポル・ポト軍を破った例もある。今後、隣国の支援のもと、国境付近の少数民族軍の攻勢があるのかもしれない。

反政府勢力にはヤクザみたいな武装組織から、行政機構と軍隊を持つ本格派まである。みかじめ料徴収から、国境密貿易、麻薬や賭博、野生動物の密売などで資金を集めていたりもし、外国勢力がバックにいる場合もある。両書とも「危機の本質」がよく判る本だ。